
とある喫茶店に籠城する彼女

さん太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある喫茶店に籠城する彼女

【Nコード】

N1122Y

【作者名】

さん太

【あらすじ】

喫茶店経営する「僕」が聞く、何気ないお客たちの会話の1コマ。今回は一組のカップルの起こす騒動について。ネタ的なもの。

とある都市のはずれで、僕は喫茶店を営んでいる。

お世辞にも大きいとか立派とかいえない、小さな喫茶店。席数は全部で14人席ほどしかないけど、小さいながらも自分の城――

――のハズだった。

いやね、事實は確かに今もそうなのだけど。

なんていうか。現状は喫茶店というのも首を傾げたいような状態になっている。

というのも。

「いい加減にあける――!!」

「嫌よ――!!」

「佐和子が出した条件、ちゃんと守っただろ？」

「だって、まさか壮太が本当に優勝するなんて、夢にも思わなかったんだもの――!」

「いいから、この扉を開けろ――!」

とまあ……。

一人の女子高生の籠城に使われてしまっているわけである。

状況としては、このお城にふさわしい小さな扉は、背の低い女子によって施錠されている。

彼女に鍵を渡したわけじゃない。内側からなら簡単に鍵を閉められる仕様なだけだ。

勝手に閉めて、内側から外に向けて叫んでいる女の子は、会話の

内容から佐和子というらしい。小さな女の子で、近くのM高の制服に身を包んでいた。

対する扉の外側から、開城を叫んでいる男子も同じくM高の制服に身を包んでいる。少々まっちょ体質で、背も高くがっちりとしている。体育会系を前面に出した感じだ。名前は壮太だと思う。同じく会話からいって。

「いい加減にしないと、お店の人に迷惑だろー!？」

「いいのよ！ このお店いつもお客なんて入っていないんだからー!」

壮太の正論に、女の子が答える。

そのとおりですよ！ 切ないけどそれが真実だけど。問題はそこじゃないですからっ!!

その後、僕は二人というか、主に佐和子を説得し、扉の前での籠城を収め二人に店内へと入ってもらった。

佐和子は「嫌よ!」と言い続けたのだが、僕が仲介すると説得すると、しぶしぶと頷いた。

そうして僕の城は、ようやく僕のものへと帰ってきたわけなのだが……。

どうしよう。この二人。

僕はがつくりと肩をおろす。

実情そんなに状況は変わっていない。

「お前、約束破るつもりかよ？ 奥までとは言ってない。ちよつとだけ、先つちよだけ入れればいいんだ」

「いやよ！ 私の下半身のことも考えてよ！」

「別に大げさに言うほどのことじゃないだろ？」

「何よ！ 壮太が小さければたいしたことないかもしれない。ただど。言いたくないけど、壮太は大きいじゃない」

と店内で大論争。

場所はカウンター席で僕の目の前。

そして入り口の目の前。

扉をあけて、すぐに閉めるお客様を見るたびに、なぜだろう。

悲しい気持ちになるんだ……。

「あの……」。

女性に無理やりせまるのは、よくないと思いますよ？」

僕は二人の会話が途切れた時を狙って、進言を入れる。

二人だけで論争していても、終わりは見えそうになかった。

「オレも無理やりはよくないと思う。だから約束を、佐和子から“県大会”で優勝したらいいよ。って言質をとったんだ。だから、無理やりとは言わない！」

「だって。まさか本当に優勝するなんて思わなかったんだもの」

つまり、しつこく言い寄ってくるのに疲れた佐和子が、無理難題を押し付けた。

コレであきらめてくれるだろう。と思ったのだけど、壮太の執念が勝って難題をクリアしたというわけのようだった。

もともと願いをかなえるつもりはなかった佐和子としては「あんな約束は破棄よー！」となり。

壮太は「その為に頑張り続けたのだから、破棄されては困る」ということだ。

若いっていいなあ。と、ついオヤジじみた考えを持ってしまう。

この年代の時は、思考が異性のことへと流れやすい。そして自分の感情が表にでて、相手の事を思いやれないものだ。

「それでも、佐和子さんこんなに嫌がっているじゃないですか」

ね？ と微笑みかけると、壮太はしょんぼりとうな垂れる。

確かに佐和子は今も全力で嫌がっており、壮太が視線を向けるとキリリと頷いた。

「確かにいい気持ちになれるのは、オレだけかもしれない。佐和子にとっては辛いだけだもんね。ごめん。佐和子」

彼としても強要することに、少しの罪悪感があったのかもしれない。

壮太はがつくりと肩を落とし、佐和子に謝った。

「壮太……」

佐和子もその謝罪をつけ、登っていた血が下がったようだった。さっきまでのキツイ表情は一転し、申し訳ないような表情へと切り替わる。

これぞ、押してだめなら、引いてみる。というやつだろうか。先ほどまでの険悪な雰囲気は、徐々に収まっていく。

「そうだね。壮太、すごくがんばっていたもんね」

水の入ったグラスを握り締め、佐和子はポツリとつぶやく。
表情に、決意も入っている。

「決めたっ！」

コップの中の水を飲み干し、彼女はいきり立つ。

「確かに約束はしたわ。女、佐和子！ 約束を果たします！……！」
「ほんとか！」

「ばああああ。と壮太の顔に笑顔が宿る。
これぞ青春。

「ただどよかったのかなあ。
僕は少し悩む。」

炊きつけたつもりはないけれど、結果的にそうなってしまった。
コレで何か間違いが起きなければいいのだけだ。
僕は何か言わなければと、考え込む。
でも他人であり、世代の違うおっさんだ。高校生に偉そうに意見をしても、聞き入れてくれるだろうか？

「場所はここでいいわよね？」
「えっ？」

佐和子の台詞に、僕はびっくりする。

「いやあの、さすがに家に帰ってゆっくりと……」

だめだだめだ。これじゃ、炊きつけで、容認したのと一緒にの台詞じゃないか。

自分の台詞に後悔する。

でもこの店は喫茶店で、いちやいちゃする場所じゃない。

「いいじゃない。客なんて誰一人、入ってこないじゃない」

今日誰もいないのは、君たちのせいですっ！！！！！！
なんていえない。

そもそも、普段から少ないのも真実。

「ちょっとあっちの席で、耳かきするぐらい許してよ」
「……耳かき？」

ぷう。と頬を膨らます佐和子。

僕は聞いた台詞に首をかしげ、聞き返した。

「約束って？」

「膝枕で耳かきだけど？」

「壮太の頭でかいから、足がしびれて嫌なのよ」

先って、耳かき棒の……？

僕は少々勘違いをしていたようだった。

っていつか、紛らわしい言い方すぎる！

「それでも、家でやってください！！！！」

二人を追いつき、脱力していすに座り込んだ。

最初から約束の内容聞けばよかった。

最近の若者は進んでいたり、変にシャイだったりしてよく分から

ない。

僕はもう、おっさんのくくりでいい。理解できなくてもいい。ため息を大きく吐き出した。もう若い世代の考えは分らない。彼らは未知の生物すぎる。

そういえばコレどうしよう。

ふと思い出し、ポケットの中のボイスプレイヤーを取り出す。ぼちと再生ボタンを押すと『先っちょだけ』とか『下半身』という単語を繰り返ししながら口論をする二人の声が再生される。

何か起きても困ると、店内に招きいれてから、ずっと録音していたのだ。

まいつか。

消去せずに、もう一度ポケットに突っ込んだ。

今度あの二人がきたら、これを聞かせてやろう。

そんな仕返しを思いつき、そのときに起こりえる状況を想像して、ちよつとだけ笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1122y/>

とある喫茶店に籠城する彼女

2011年11月11日07時09分発行